



「ひらほく新聞」で検索!

★感謝で継続12年目に突入★

http://www.hirahoku.com/

☆ぜひ、バックナンバーをどうぞ!

発行所 読売センター平塚北部(ひらほく) 山本 直 〒254-0013 神奈川県平塚市田村9-4-32 電話 0463-54-2807



神話の時代から二千年以上続く「ひのものとくに」日本。その私たちの日本には、千百年以上前につくられた真心をつなぐ愛の歌『君が代』がある。永い歴史の中で国民みんなの歌として愛され、やがて国歌となった『君が代』が、いかに受け継がれてきたのか。未来を創る日本と世界の子どもたちへ向け、和を尊び、命を慈しむ、その日本人の心を恩送りするべく、博多の歴史・白駒妃登美さんを中心に創作されたバイリンガル絵本『ちよにやちよに』。込められた思いをご紹介します。

『君が代』の本歌

本歌は、今から千百年以上前の平安時代前期に編纂された『古今和歌集』にある。

題しらず 読人しらず

わがきみは ちよにやちよに さざれいしの いはほとなりて こけのむすまひ

(古今和歌集三四三)

もとの歌は、「君が代」ではなく「わが君」。当時、主に女性が、愛する男性を呼ぶ時に「わが君」と言った。この歌は、平安時代に生きたある人物が、恋しい人に「いつまでも、長生きしてくださいね」と歌い上げたラブレターだったのだ。「賀歌」といって、おめでたい時に歌われる「言祝

ぎ(お祝い)の歌」に分類、たくさんの人に愛され、大人気の歌だったのだらう。

その証しに、およそ百年後の千三年頃、藤原公任という人が、みんなが楽しく朗詠できる名歌を編纂した『和漢朗詠集』に、「わが君は」が「君が代は」と手を加えられて、登場する。

君が代は 千代に八千代に

さざれ石の いはほとなりて こけのむすまひ

全体を訳すと、「あなたの命(あなたさまの御代)が、いつまでも、いつまでも、永く続きますように...。たとえば小さい石が、永い時間をかけて大きな岩に成長し、その上にたくさんのお草が生えるようになるまでね」。

「わが君」が「君が代」となったことで、歌に新たな命が吹き込まれた。大切な人の長寿と幸せを祈る歌であり、一族の繁栄を祈る歌。肉体は滅んでも、魂は受け継がれ、行き続けていく。その永遠の命を壽ぎ、魂を受け継ぐことを心に誓う歌でもある。

こうして、この歌は私たち日本人の暮らしに溶け込み、千年以上の永きにわたって愛され続けてきた。『君が代』は、江戸時代までは、私たちみんなの歌、言い換えれば国民の歌だった。

国歌『君が代』

ところが、明治時代になって、国民みんなの歌は、新たな局面を迎える。『君が代』が国歌として歌われるようになったのだ。

国歌になると、国の様々な行事で歌われることが多くなり、「君が代」という表現のまま「大君の代」と同じ意味が発生するので、次第に「天皇のお治めになる御代」という意味も込められるようになった。さらに戦前・戦中は、天皇の御代を壽ぐ歌として、学校でも教えられた。

長い歴史の中で、捉え方は時代ごとに変わってきたが、『君が代』は国民に愛され続け、明治以降は国歌

として歌い継がれてきた。実は、法的に国歌と定められたのは、平成に入ってから。平成11年に「国旗及び国歌に関する法律」が制定され、『君が代』は、正式に日本の国歌となった。

国歌を天皇陛下と国民が一緒に歌うとき、国民は陛下のご長寿と平和なこの国がいつまでもいつまでも続きますように」と願うが、陛下は、「国民の命の尊さを思い、我が国と世界の人の々の安寧と幸せを、そして平和を祈って」くださる。お互いに思いやる心が響き合う歌、それが『君が代』なのだ。

世界一古く 世界一短い国歌

わずか32音から成る、世界で一番短い国歌『君が代』。その歌詞は10世紀に始まり、世界で一番古い歌詞を持つ国歌でもある。

そこには和を尊び、命を慈しむ、先人たちの真心が溢れている。もしかしたら、『君が代』は、先人たちから今を生きる私たちに、そして同じ地球に暮らす、あらゆる命に向けられた、時空を超えたラブレターなのかもしれない。この『君が代』の歴史が、私たちの未来に希望の光を灯してくれると信じて、この絵本を創らせていただいた。

長い歴史の中で、捉え方は時代ごとに変わってきたが、『君が代』は国民に愛され続け、明治以降は国歌

推薦者・中西進 先生の想い

『君が代』の本歌は、恋文(ラブレター)愛の歌。しかも、詠み人しらず。国歌なのに作者不明。それがこの国のありように通じる。他者を愛し、自然を畏れつつ敬い、大らかに和やかに暮らすことを重んじてきた日本人。そこには根源的な想いと願いが込められていて、千年以上にわたり先人たちに愛されてきた。

しかし、開国して間もない百四十年程前、外交の国際儀礼上、「国歌」の演奏が必要となった。白羽の矢が立った『君が代』は、富国強兵のもと、国家主義、軍国主義、戦争と結びつけられるようになり、国家政策として使われ、終戦を迎えた。その結果、嫌悪、否定されたりする状況が80年近く、今も続いている。

歌には何の罪もない

このことは、千年以上愛され続けて、ほんの百年ほどの、人間のしわざ、その結果にすぎない。

この絵本は『君が代』を「もともにもどす」大切な役割がある。だから私は、この絵本の出版に大賛成だ。この役割を正面切って引き受けた一般向けの書物は、これまで無かった。実に大切な役割の本になる。

寄付本 プロジェクト

上記紹介の国文学者・中西進先生のお話にあるように、諸問題からこの絵本は多くの一般書店での販売はない。ご注文は、アマゾン、または出版元の「文屋」公式サイトからとなる。

そのうえで、未来を創る日本中・世界中の子どもたちに、日本人の心をぜひ届けたいと、出版元の「文屋」さんが、バイリンガル絵本(和英対訳)『ちよにやちよに』愛のうた きみがよの旅』をプレゼントする企画、「寄付本プロジェクト」を展開中。

ご賛同いただいた皆様からお預かりする資金を活用して、「文屋」がその金額に応じた書物を、寄付先の施設や学校の子どもたちにプレゼントする。「愛と善意の循環事業」。よろしければ、ご参加ください。「ちよにやちよに 寄付本」で検索(白駒妃登美さんご挨拶動画もあり)。



日本画家の吉澤みかさんが、その世界観を胸の透くような美しい絵画で表現。NHKキャスター等で活躍中の山本ミッシェルさんが英訳。大人も子どもも楽しく学べる、そして英語学習にも。ぜひ多くの人へ。



## 編集後記

折りしもこの夏は、東京五輪・パラリンピックでの日本選手の大活躍、金メダル獲得により、国歌『君が代』を有難く聴く、感動の機会を数多くいただいた。

そのメダル授与式で、表彰台の一番上で金メダルを手に入れた『君が代』を聴いて大泣きしたアスリートがいた。パラリンピック・競泳100mバタフライ(視覚障害S11)、全盲のエース、木村敬一選手だ。

目が見えない木村選手にとっては「国歌を聴けるのは金メダリストの特権。唯一金メダルだと認識できてきた、頑張ってきた証が形となって幸せです」と思いがあふれ出した。

08年北京大会から4大会連続出場。長年エースとしてパラ競泳界を引っ張ってきたが、金メダルは初だ。東京大会での悲願達成までの道のりは単身米国武者修行など、想像を絶する努力があった。そして、常に刺激合った仲間、今回銀メダルの良きライバル、富田宇宙選手の存在があった。

★「木村敬一 君が代に涙 金メダル獲得の証」NHKの特集動画(2分)を、ぜひ皆さんにも受け取ってもらいたい。↓↓↓



なれば「自然の巡り合わせ」ですから、あれこれ深く考えず、「去る者は追わず、来る者は拒まず」でいいのです。

新しい仕事やプロジェクト、何かの団体の役職等々の頼まれごと。あるいは、誘われた食事会や飲み会、勧められた本や映画、紹介された人…。

立命館アジア太平洋大学学長の出口治明氏は、「食事やお酒に誘われたら、原則、断らない」「10人以上集めてもらったら、可能な限り、どこへでも話しに行く」のが信条だという。ご縁を大切に生きる生きた。逆に、ご縁がなくなる「別れ」もある。最後の別れは「死別」。仏教では「苦しみ」のことを「思い通りにならないこと」だという。

それが「一切皆苦」。世の中のすべての事象は、自分の思い通りにはならない。死も、別れも、出会いも。だからこそ、『ご縁に導かれて行動する』こと、人生はうまくいく。目の前にやってきた「ご縁」を大切にしたい。

このミニミニの題材も、その時々ご縁に導かれた内容からご紹介している。タイムリーに誰かの心に響く、留まることを祈りつつ。

心温まる書籍紹介プロゲ『人の心に灯をともし』より久々ご紹介します。

## 「ご縁」に従う

曹洞宗徳雄山建功寺、  
榎野俊明住職の書籍より

「ご縁」という言葉は人間関係でよく使われますが、仕事も日常の細々としたことでも、すべて「縁もの」。私たちは「ご縁に導かれて行動すること」で、人生はうまくいくようにできているのです。逆にいうと、誰か、何かとうまくいかなかった場合は、「縁がなかった」ということ。

たとえば入学できなかった学校や、就職できなかった会社、契約が結ばなかった事案、打ち切りになった仕事、スケジュールが調整できずに断らざるをえなかったオファー、親しく付き合ったところまではいかななかった人。これらは、単に「縁がなかった」だけのことなのです。そう考えると、すっきりしませんか？ 心が軽くなりませんか？

それにご縁に逆らって、無理やり何か事を進めたところで、うまくいきません。たとえば実入りのいい仕事が入っても、すでにお受けした仕事があるなら、そちらを優先して断るべきでしょう。損得勘定に従うと間違えます。ご縁に従えば間違えることはありません。

江戸時代までは、「さらば、ご機嫌よろしう」とか「さようなら、ご機嫌よう」と全部を言って別れていた。ところが、明治以降になると男性が「さようなら」と言って、女性が「ご機嫌よう」と掛け合いのようになり、言い分けるようになった。しかも、昭和になると、女性のほとんども「ご機嫌よう」とは言わないで、「さようなら」だけを言って別れるようになってしまった。

今日でも、老人の女性方で、まだ「ご機嫌よう」と言って別れる方がいらっしやるが、日本人の大半の男女が「さようなら」というつなぎの言葉だけを言って別れ、「ご機嫌よう」とは言わなくなりました。そしていつの間にか、誰にもその意味が分からなくなりました。

このようにいきさつを考えてみると、日本の挨拶は、やっぱり太陽さんとながっていたことがわかる。「さようなら、太陽さんと一緒に生活していいかな」「さようなら、太陽さん」といって、太陽さんとお元気でいいかな、という言葉を、古くは太陽の意図であった。いまでも、太陽のことを「今日様」と呼ぶ地方が多い。高知の土佐では「こんにちさん」「新潟の刈羽では「こんにちさん」、岐阜ではこれがな

まっつて、「コンニツアマ」と呼ぶ。夏目漱石の小説坊ちゃんの中にも、「そんなことをしたら今日様(太陽)へ申し訳ないがなもし」というセリフがある。

つまり、「今日は」という挨拶は、「やあ、太陽さん」という呼びかけだったのだ。「元気でですか」の元気とは、元の「元氣」という意味だから、太陽の「元氣」をさすことになる。

「今日は、元気でですか」とは、あなたは太陽のエネルギーが原因で生きている身体だということをよく知って、太陽さんと一緒に明るく生きていますか、という確認の挨拶だったのだ。

それを受けて、「はい、元気で」と答える。つまり、「はい、太陽さんと一緒に元気に生きていますよ」と応答するわけだ。それから、「さようなら(ば)、ご機嫌よう」となる。「機嫌」とは、「気分」とか、「気持ち」という意味。したがって、「さようなら、ごきげんよう」の意味は、「太陽さんと一緒に生活しているならば、ご気分がよろしいでしょう」となる。

「今日は、お元気でですか」「はい、おかげ様で元気で」「さようなら、ご機嫌よう」これが、わたしたちの挨拶の基本だったのだ。

■白駒妃登美さんは数多くの大切な教え、「日本のこころ」について、東洋思想研究家の境野勝悟先生(大磯在住、道塾慶陽館を創設)から学び続けている。先生が熱弁二時間、全校高校生七百人が声一つ立てず聴き入ったという講演録、『君が代』の教えも登場する書籍『日本のこころの教育』より、以下ご紹介します。

## 「今日は」「さようなら」の意味も太陽に関係があった

(日本人は千年以上前から、お母さんを「太陽さん」と呼んでいたという話に続き)

「今日は」の意味も、「さようなら」の意味も、その挨拶だけを独立させて考えてしまうと、その真意がつかめなくなる。

私たちが知人に出会ったとき、「今日は」という挨拶のほかに、「お元気でですか」という表現を使っている。この二つは、それぞれが孤立した応答ではなく、「今日は、お元気でですか」と続いていた挨拶なのだ。この「今日は」「今日」という言葉は、古くは太陽の意味であった。いまでも、太陽のことを「今日様」と呼ぶ地方が多い。高知の土佐では「こんにちさん」「新潟の刈羽では「こんにちさん」、岐阜ではこれがな